

# 第 653 回

## 日本小児科学会東京都地方会講話会

### プロ グ ラ ム

日 時 2019年 3月 9日(土) 午後 2時 00分

場 所 東京医科大学病院本館 6階臨床講堂



#### 世話人

山西 慎吾  
プログラム係  
日本医科大学 小児科 03(3822)2131  
(FAX) 03(5685)1792

会 場 係  
熊田 篤  
東京医科大学 小児科 03(3342)6111  
(FAX) 03(3344)0643

事 務 局  
03(5388)7007  
e-mail:jpstokyo-office@umin.ac.jp

#### 次回以降開催予定日

2019年 5月 11日(土) 東京医科大学病院本館 6階臨床講堂

2019年 6月 8日(土) 東京医科大学病院本館 6階臨床講堂

2019年 7月 13日(土) 東京医科大学新病院 9階講堂

# 第 653 回 日本小児科学会東京都地方会講話会演題

(1題6分、指定発言5分、追加討論3分以内、厳守のこと。○印演者)

第1グループ 14:00—14:35

座長 立花 奈緒（東京都立小児医療総合センター消化器科）

1) 12歳時に症状を呈した遅発性横隔膜ヘルニアの1女児例

○三崎 萌子<sup>1)</sup>、堤 範音<sup>2)</sup>、山田ひかり<sup>2)</sup>、税所 純也<sup>2)</sup>、加藤 幸子<sup>2)</sup>、千代反田雅子<sup>2)</sup>、長尾 竜兵<sup>2)</sup>、西亦 繁雄<sup>2)</sup>、河島 尚志<sup>2)</sup>

（東京医科大学八王子医療センター卒後臨床研修センター）<sup>1)</sup>、（東京医科大学小児科）<sup>2)</sup>

生来健康な12歳女児。3日前より腹痛・嘔吐などの消化器症状を認め、胸腹部CT・術中所見で左横隔膜から肺野にかけての腸管の脱出を認め遅発性横隔膜ヘルニアの診断となった。消化器症状をきたす小児疾患の鑑別として横隔膜ヘルニアも考慮すべきである。

2) 診断に難渋した穿孔性虫垂炎の1例

○薄田 英樹<sup>1)</sup>、大田 倫美<sup>2)</sup>、大熊 喜彰<sup>2)</sup>、相原 陽香<sup>2)</sup>、安心院千裕<sup>2)</sup>、瓜生 英子<sup>2)</sup>、中山 純子<sup>2)</sup>、水上 愛弓<sup>2)</sup>、五石 圭司<sup>2)</sup>、佐藤 典子<sup>2)</sup>、七野 浩之<sup>2)</sup>

（国立国際医療研究センター病院医療教育部門）<sup>1)</sup>、（同 小児科）<sup>2)</sup>

4歳の男児。10日間持続する発熱を主訴に来院した。受診時に発熱以外の所見がなく、腹部超音波検査でも異常を認めなかったため診断に難渋した。経過中に強い腹痛が自然軽快していたという追加情報から、再度施行した腹部超音波検査で腹腔内膿瘍を発見し、穿孔性虫垂炎の診断に至った。小児の虫垂炎では右下腹部痛や発熱などの典型的な症状が揃わないこと、穿孔後腹痛が軽快することがあり、腹部超音波検査を繰り返すことが有用である。

指定発言 渡邊 美穂（東京大学小児外科）

3) 心内修復術後に著明な甲状腺機能低下症を認めた女児例

○石橋誠二郎、中野 克俊、大橋 瑛梨、浦田 晋、中川 良、高橋 千恵、大和田啓峰、朝海 廣子、梶保 裕子、平田陽一郎、神田祥一郎、犬塚 亮、岡 明（東京大学小児科）

3か月の女児。新生児マスクリーニングでは異常は認められなかった。ファロー四徴症・肺動脈弁欠損症に対して日齢74に心内修復術を施行。術後30日の血液検査ではTSH702 uIU/mLと甲状腺機能低下を認めた。レボチロキシン投与開始し、以後改善傾向であるが、原因は周術期のポビドンヨードによる可能性が高いと考えられた。

第2グループ 14:35—15:05

座長 玉一 博之（順天堂大学小児科）

4) インフルエンザを契機に溶血発作を呈したグルコース-6-リン酸脱水素酵素（G6PD）欠損症の1例

○宮岡 双葉、友田 昂宏、山下 基、磯田 健志、井上 健斗、神谷 尚宏、柳町 昌克、今井 耕輔、高木 正稔、金兼 弘和、森尾 友宏（東京医科歯科大学小児科）

G6PD欠損症の7歳男児。インフルエンザ感染後にHb 5.3g/dLの溶血性貧血を認め、急性溶血発作と診断した。溶連菌迅速検査も陽性でありオセルタミビル、アモキシシリソ、整腸剤の内服を併用していた。入院にて補液管理を行い、無輸血で自然に貧血の改善傾向を確認できた。溶血発作に影響した因子について文献的考察を含めて報告する。

5) Jacobsen 症候群に LAHPS (lupus anticoagulant-hypoprothrombinemia syndrome) を合併した1例

○佐藤 綾美、梶保 祐子、数井真理子、高橋 千恵、神田祥一郎、三谷 友一、樋渡 光輝、朝海 廣子、岡 明  
(東京大学小児科)

Jacobsen 症候群に伴う血小板低下、出血性ショック既往のある10歳女児。胃腸炎後に肉眼的血尿が出現、PT-INR1.53、APTT 117秒と凝固異常を呈した。第II因子低下、低補体血症、ループスアンチコアグレント陽性、クロスマキシング試験 inhibitor pattern、aPS/PT 抗体陽性を認め LAHPS と診断、その後自然に改善した。Jacobsen 症候群で LAHPS 発症の報告はないが、合併により出血傾向が増強したと考えた。

6) セフメタゾールによるビタミンK欠乏性出血を呈した経管栄養の男児例

○村木 國夫、大越 啓吾、本多 隆也、花田 琴絵、山岡 正慶、秋山 政晴、井田 博幸  
(東京慈恵会医科大学小児科)

10歳男児。高悪性度神経膠腫のため経管栄養で在宅移行中、尿路感染症の治療でセフメタゾールを投与していた。使用後5日で歯肉出血・血便を認めた。PT、APTT 延長、PIVKA-II の上昇からビタミンK欠乏症と診断した。経管栄養剤のビタミンK含有量は少なく、セフメタゾールは他の抗菌薬よりビタミンK欠乏に陥りやすいため、注意が必要である。

総会及び名誉会員授与式 15:05—15:25

平成31年度 名誉会員 星加 明徳先生、大澤 眞木子先生

休憩 15:25—15:35

感染症だより 15:35—15:55 (講演:15分+質疑応答:5分)

座長 岩田 敏 (国立がん研究センター中央病院感染症部)

神谷 元 (国立感染症研究所感染症疫学センター)

教育講演 (iii 小児科領域講習) 15:55—16:55 (講演:50分+質疑応答:10分)

座長 門脇 弘子 (山王病院小児科)

小児日常診療で遭遇するミトコンドリア病

三牧 正和 (帝京大学小児科)

ミトコンドリア病とは、ミトコンドリアのエネルギー代謝に関する機能の障害がもたらす疾患の総称であり、種々の病型が存在する。先天代謝異常症のなかでは最も患者数が多く、小児科医が必ず知しておくべき疾患であるが、その症状や病因の多様性ゆえに診断に苦慮することも多い。本講演では、ミトコンドリア病の主な病型や各臓器障害の特徴を整理するとともに、近年の分子遺伝学の進歩によってもたらされた疾患概念の広がりを紹介する。そして、日常診療で見逃さないためのポイントと診断プロセスにつき、具体例を交えながら日常臨床で役立つようわかりやすく解説したい。

休憩 16:55—17:00

### 第3グループ 17:00—17:20

座長 平山 恒憲（東京都立東大和療育センター）

#### 7) Dravet 症候群に急性脳症を合併した1例

○武藤 大和、安部 信平、細井 賢二、北村 裕梨、箕輪 圭、神保 圭佑、遠藤 周、春名 英典、清水 俊明  
(順天堂大学小児科)

Dravet 症候群の7歳女児。てんかん重積状態のため前医に救急搬送され、チオペンタールで鎮痙した。鎮痙後も意識障害が遷延し、急性脳症の診断で集中治療のため当院に転院した。ステロイドパルス療法など各種治療を行ったが、重度の神経学的後障害を残した。Dravet 症候群では急性脳症を合併しやすく、文献的考察を加え報告する。

#### 8) 軽微頭部外傷後に急性脳梗塞をきたした1例

○岡田 創<sup>1)</sup>、高木 篤史<sup>1)</sup>、伊藤 保彦<sup>1)</sup>、服部裕次郎<sup>2)</sup>、  
(日本医科大学小児科)<sup>1)</sup>、(同 脳神経外科)<sup>2)</sup>

1歳男児。椅子から転倒した後、左上下肢の麻痺を認め精査の結果脳梗塞を認めた。小兒において軽微な頭部外傷後、大脳基底核や深部白質の中大脳動脈穿通枝領域に脳梗塞が出現し得ることが知られている。小兒の脳梗塞は頻度は低いが原因が多彩であるため突然発症の片麻痺やけいれんでは鑑別としてあげる必要がある。

### 第4グループ 17:20—17:55

座長 宇田 和宏（東京都立小児総合医療センター感染症科）

#### 9) 発熱を伴わない右下肢の伸展不良から再発の診断に至ったB群レンサ球菌感染症の1例

○赤塚 祐介<sup>1)</sup>、幾瀬 圭<sup>1)</sup>、関口 早紀<sup>1)</sup>、室田 直紀<sup>1)</sup>、西山 樹<sup>1)</sup>、塚田いぶき<sup>2)</sup>、丘 逸宏<sup>1)</sup>、佐藤 真教<sup>1)</sup>、吉田 登<sup>1)</sup>、谷口 明徳<sup>1)</sup>、辻脇 篤志<sup>1)</sup>、小松 充孝<sup>3)</sup>、大友 義之<sup>1)</sup>、新島 新一<sup>1)</sup>

(順天堂大学練馬病院総合小児科)<sup>1)</sup>、(多摩南部地域病院小児科)<sup>2)</sup>、(賛育会病院小児科)<sup>3)</sup>

日齢46の女児。日齢11にB群レンサ球菌(GBS)による髄膜炎、菌血症を発症し日齢32まで抗菌薬投与を行った。今回は発熱を呈さない右下肢の伸展不良を主訴に受診し、GBS膝関節炎、菌血症の診断をした。GBS再感染時に化膿性関節炎を呈した報告は過去にないが、侵襲性GBS感染症後は再発に留意して診察すべきである。

#### 10) パリビズマブの初回投与前に発症し入院加療を要した早産児RSウイルス感染症の2例

○片山 大地、長野 伸彦、青木 亮二、土方みどり、不破 一将、清宮 綾子、香山 一憲、加藤 亮太、小森 晓子、岡橋 彩、吉川 香代、諸橋 環、高橋 滋、森岡 一朗  
(日本大学板橋病院小児科)

症例1は在胎30週、体重1,476gで出生した生後3か月の女児。8月のパリビズマブ投与前に百日咳とRSウイルス肺炎の混合感染を発症し高流量鼻カニュラ酸素療法を行った。症例2は在胎29週、体重1,234gで出生した生後3か月の男児。8月の投与前に酸素投与を必要とするRSウイルス肺炎を発症した。8月からの投与でも予防しきれない症例が存在する。

#### 11) *Eikenella corrodens*が検出された涙嚢炎の女児例

○田中 美紀<sup>2)</sup>、荒木孝太郎<sup>1)</sup>、松島 崇浩<sup>2)</sup>、堀越 裕歩<sup>3)</sup>、幡谷 浩史<sup>1)</sup>  
(都立小児総合医療センター感染症科)<sup>1)</sup>、(同 総合診療科)<sup>2)</sup>、(同 感染症科)<sup>3)</sup>

4歳の女児。右下眼瞼の腫脹、発赤、疼痛、眼痛を認めた。涙嚢炎の診断でセファレキシン内服後も増悪したため入院した。涙嚢穿刺液培養から第1世代セフェム系抗生物質に耐性の*Eikenella corrodens*と*Haemophilus influenzae*(BLNAR)が検出された。初期治療が奏功しない涙嚢炎ではこれらの菌を考慮する。

指定発言 福岡 かほる(東京都立小児総合医療センター感染症科)

## 【運営委員会だより】

1. 第 653 回講話会（2019 年 3 月 9 日）のプログラム編成について報告がありました。
2. 第 653～655 回講話会の教育講演および感染症だよりについて、講師と座長が確認されました。
3. 次期プログラム委員について、日本大学の石毛美夏先生に 2019 年 5～7 月のプログラム編成をお願いすることを報告し了承されました。
4. 総会議案について確認されました。
5. 子どもの健康週間に關しては昨年同様にパンフレットを作成し、直近 3 年間の類似したテーマにしないこと、印刷部数は 30,000 部とすることで了承されました。
6. 来年度の教育講演の座長の確認が行われました。
7. 6 月の演題の締め切りが 4 月 30 日となっていますが、今年は連休となるので、締め切りを 4 月 22 日に変更することを了承されました。
8. 東京都地方会で作成する「緊急時を念頭にしたマーリングリスト」について、これまでに 677 名（全会員の約 31%）の登録があったことが報告されました。
9. 第 652 回講話会（2 月）の出席者は 262 名、ベビーシッタールーム利用者は 1 名、前回講話会以降の新入会者 8 名、退会者は 20 名でした。

## 【演題の申し込みについてのお願い】

- ・ 動画が含まれる場合には、その旨を明示して下さい。
- ・ 原則として指定発言をつけて下さい。（共同演者から指定発言は頂けません）
- ・ 演題の締切は次のようにになります。
- ・ 運営委員会にて抄録の修正をさせて頂く事もございますので、原則としてご了承下さい。

講話会開催月	演題締切	講話会開催月	演題締切	講話会開催月	演題締切
1月	前年 11 月 30 日	2月	前年 12 月 25 日	3月	1 月 31 日
5月	2 月 28 日	6月	4 月 22 日	7月	5 月 31 日
9月	6 月 30 日	10月	8 月 31 日	12月	9 月 30 日

申込演題が規定数を上回った場合、さらに 1 回先になることがありますのでご了承下さい。

その場合、事務局よりご連絡します。

## 【演者の先生方へのお願い】

- ・ 一次抄録は 160 字以内に。また、二次抄録は日本小児科学会雑誌に掲載されますので規定の 200 字以内を厳守くださるようお願い致します。（原稿はワード入力で e-mail にて事務局へお送り下さい。）
- ・ 出席した会員に発表の意味をより強く、明確に伝えるために、最後（または適切な時期）に Take Home Message（この発表から学ぶこと）を手短な一文で記したスライドを付け加えていただくようお願い致します。

## 【会員登録事項の変更届についてのお願い】

- ・ 自宅、勤務先の住所（プログラム送付先）等の変更または、改姓があった場合は、速やかに東京都地方会事務局までご連絡下さい。
- ・ 退会される場合も必ずご連絡下さい。そのお届けがない場合は次年度も継続として年会費の請求を致します。

東京都地方会事務局 e-mail : jpstokyo-office@umin.ac.jp / FAX : 03 (5388) 5193

## 【事務局よりご連絡】

- ・ 今回の教育講演には日本小児科学会専門医新制度における小児科領域講習の単位が付与されています。受付開始から教育講演開始まで引換券を配布しますので、教育講演終了後から講話会終了までの間に引換券と単位認定証とを交換して下さい。  
なお、引換券は当日限り有効です。  
また教育講演開始後に入场、及び終了前に退出された方には小児科領域講習単位はお渡しできません。
- ・ 子どもの健康週間パンフレットは 2016 年版と 2017 年版も在庫がございます。ご希望の先生は事務局までご連絡下さい。なお在庫の関係でご希望部数をお送り出来ない場合がございますことをご了承下さい。

## Presentationについて

発表は Computer Presentation (Windowsのみ可、Macは不可) のみで受け付けます。MacのPC持ち込みによる発表はご遠慮下さい。Powerpoint 2000以上で作成、Font 文字は Powerpoint 備え付けのみ。CD-RもしくはUSBメモリーにて、第1、2 グループ発表者は午後1時30分までに、第3 グループ以降の発表者は午後3時までにスライド受付まで持参して下さい。機器操作は、当方で行います。あらかじめウイルス checkをお願い致します。

## 動画について

動画の発表にはトラブルが多いため、下記の方針をご理解いただきますようお願い致します。

- ① 一般演題での動画の使用はできる限りお控えいただくようにお願い致します。
- ② 動画の使用が不可避と考えられる場合、ファイルのセーブ法などの注意事項がありますので、学会事務局に必ず事前にご連絡下さい。
- ③ ②の場合にも、動画の映写にトラブルがあったときに備え、静止画像のみで構成された代替パワーポイントファイルをご用意下さい。当日、動画の映写が不可能と判断された場合には、代替パワーポイントファイルを用いて、時間通りに学会を進行させていただきますことをご了承下さい。

## 〈ベビーシッタールーム開設のお知らせ〉

乳幼児を同伴される方のために、ベビーシッタールームを開設します。利用ご希望の方は、利用日の**10日前**までに問診票をダウンロードし、必要事項を記載の上、事務局へe-mailまたはFAXでお申し込み下さい。問診票は東京都地方会ホームページにございます。利用当日、お子様が好きな食べもの・飲料・おもちゃ・着替え・おむつなどに名前を付けてご持参下さい。キャンセルされる場合は、3日前までにご連絡をお願い致します。連絡のないキャンセルの場合は、次回以降の利用をご遠慮頂く場合がございます。なお費用は学会が負担致します。

日本小児科学会東京都地方会事務局 TEL 03-5388-7007/FAX 03-5388-5193  
e-mail : jpstokyo-office@umin.ac.jp

# 症例・研究を発表してみませんか

## — 小児科専門医を目指す方へ —

ご投稿をお待ちしております

小児科臨床では、投稿いただきました論文には必ず査読が入ります。投稿規定の詳細は弊社ホームページをご覧ください。



### 編集委員

今井孝成・浦島崇・小林正久・鈴木光幸・  
田中恭子・長谷川大輔・張田豊・堀越裕歩

(第72巻)

2号 ミニ特集

小児気管支喘息の治療

—ガイドラインをふまえて—

A4サイズ・  
全面2色に

(第71巻)

12号 特集

抗菌薬の適正使用と  
院内感染対策について考える

小児科臨床

Japanese Journal of Pediatrics

2月号

小児気管支喘息の治療

—ガイドラインをふまえて—

普通号(年10回) 2,700円+税  
特集号(年2回) 増刊号(年1回)  
年間購読料(前納) 43,000円+税

増刊号

よくある疾患の診かた  
—他科からの助言—

5号 特集

私の処方 2018



日本小児医事出版社



株式会社 日本小児医事出版社

〒160-8306 東京都新宿区西新宿5-25-11 TEL 03-5388-5195 FAX 03-5388-5193